

## II-(11) 電子図書館マネジメント

筑波大学大学院図書館情報メディア研究科准教授  
宇陀 則彦

### 1. 講義の趣旨

電子ジャーナルや電子ブックの提供が進んだ現在においては、大学図書館の主たる資料は電子資料といっても過言ではない。したがって、これまでのように Web サイト上に電子ジャーナルや電子ブックのリストを並べるだけでは十分なサービスとは言えない。また、受験生が大学の情報を得るのも Web、大学生が就職活動で企業の情報を得るのも Web というように、Web サイトの印象が組織自身の印象となっている。大学や企業はこのことをよく知っており、組織の顔としての Web サイトデザインに力を入れている。組織の顔である以上、そこには組織の理念や特徴はもちろん、Web サイトにおける直接サービスの提供および実世界における波及効果まで、組織としての経営戦略が Web サイト上に表われる。

翻って大学図書館はどうであろうか。主力商品である資料の大部分が電子化されつつあるにも関わらず、いまだに多くの図書館は Web サイトをおまけ扱いしており、図書館サービス全体の中での優先度は高くない。Web サイトが図書館の顔であることを意識し、電子サービスの効果はもとより、館のサービスへの波及効果も考えに置いて電子図書館をデザインしなければならない。そのためには、電子図書館構築を単なるシステム導入にとらえるのではなく、図書館サービス全体のなかでどう戦略的に位置づけるかという電子図書館マネジメントとして考える必要がある。

### 2. 筑波大学電子図書館システムのリプレースを通じて

- 本質的なのは新しいパラダイムに移行する意志があるかどうか。
  - コンセプトが重要
  - リソースオーガナイザの提案
- パラダイム移行を妨げる要因
  - 同じ業務システムにしておけばよいだろうという保守性
  - システムベンダーへの依存
  - OPAC 第一主義の利用者サービス
- ソフトウェアの寄せ集め 対 統合システム
  - ソフトウェアを寄せ集めただけではシステムにはならない。呼びたくない。
  - 業務システムから電子情報資源管理までトータルにサービスするシステム
  - トータルシステムの意味が昔とは違う。
- ページデザインについての議論
  - コンピュータの画面はとても狭い。画面構成のパーセンテージにこだわること
  - お知らせと開館カレンダーの呪い

◇ 画面の 80%がお知らせを占めているサイトがある。

- リプレース後 2 年経って思ったこと

### 3. 電子図書館システムの運用

- 情報処理センターのサービス手法に学ぶ
  - システムのメンテナンスは図書・雑誌のメンテナンスとは全然違う。
  - システムは仕様どおりには動かないもの。稼動直後のチューニングが勝負
- 迅速性第一のクレーム対応
  - 次の日直っていなければ顧客は逃げる。
  - 現場レベルで判断しないと間に合わない。
  - 図書館内部の問題は顧客には無関係
- 沈黙する顧客 使われないシステム
  - 一人のクレームは全員のクレームだと思え。(大げさではなく)
  - 黙っているからといって問題がないわけではない。
  - 顧客は黙ってシステムを見捨てるものである。
  - システムトラブルはコピー機が故障したのとはわけが違う。
- アクセスパスの問題
  - 情報発信型のサイトはトップページから順番にアクセスされる単一パスと思って  
も差し支えないが、情報ツール型は何通りものアクセスパスがある。
  - アクセスパスコントロールが重要
    - ◇ ページ構成イコールアクセスパスではない。
    - ◇ メインストリートとなるべきアクセスパスを裏道にしないこと。
    - ◇ 顧客ごとに使うアクセスパスは異なる。
- ワンクリックにこだわれ

クリックが 1 回多いだけで使いにくいシステムと感じるもの。システムの都合（あるいは業者の言い訳）のせいにしないこと。ツークリックの差は致命的。

### 4. 電子図書館サービスは何をするものか？

- 館（やかた）のための情報発信を行っていた時代(Web1.0)
  - World Wide Web が登場した頃は、ホームページを持つことがまず目標とされ、館の情報を発信するということが中心であったが、WWW 登場以来 10 年が経過した今、もはや情報発信だけでは済まない。WWW をひとつの情報ツール（複数のソフトウェアが連携して動作する統合環境）と捉えるべきである。
- 図書館サービス全体に対して電子図書館サービスの占める割合
  - 来館者数とアクセス数を単純に比較するというわけにはいかないが、潜在的にはネットワークを介してアクセスしてくる利用者のほうが多いだろう。図書館サービス全体のなかで電子図書館サービスはどのような位置づけにあるのかを考え、

戦略を立てるべきである。

- Google を越えて
  - 何かを調べるとき、学生の多くは Google を最初に使うと思われる。電子図書館を使うときもあるが、ほとんどが OPAC を検索するだけである。(しかし、本当にそうだろうか)
  - 館の情報と OPAC だけ提供すればよいというパラダイムをそろそろ変えるべき。
  - 局所的に見るなら、図書館ポータルのようなシステムを構築し、顧客を増やすことを考えればよいが、顧客からみてこれは最適解だと言えるのか？
  - Web 全体からみれば、Google も電子図書館もサービスノードの一つにすぎない。その中で電子図書館というサービスノードが果たす役割は何かという視点で戦略を立てなければ、顧客を獲得することは難しい。
  - インターネット上のどこのサイトから出発しようが、必ず電子図書館というサービスノードを通るということになれば、図書館は Web 環境の不可欠のプレイヤーとして生き残ることができる。
  - 出発点や終着点にこだわる必要はない。Google が出発点でもよい。人がたくさん集まる場所に広告をだすのが効果的なように、人がたくさんアクセスするサイトから電子図書館に誘導することを考える。
- 電子図書館の顧客にも種別がある。
  - 当たり前のことだが、電子図書館の利用者も来館者同様、学部学生、大学院生、教員など様々な利用者がいる。しかし、ネットワークの向こう側にいて姿が見えないと、みんな同じサービスでよいと思ってしまう。
  - 最近、「在学生向け」「一般者向け」というようなリンクボタンを設け、利用者の種別ごとに誘導したつもりになっているサイトをよく見かける。しかし、そのほとんどは項目を少し省いたり、加えたりしているだけで本気で種別を意識しているわけではない。むしろ、欲しい情報は別のカテゴリに入っていて、よけいな手間が発生する。

## 5. 機関リポジトリ

- 電子図書館と機関リポジトリって別物なのか。
- 機関リポジトリの位置づけ
  - 図書館にコンテンツが戻ってきた。
  - 予想していたよりずっと面白い。
- 孤立したコンテンツと関連したコンテンツ
  - 書店は 1 冊 1 冊にこだわり、図書館はコレクションにこだわる。デジタルコンテンツでも同じこと。
- CSI 事業について

## 6. Web2.0 の時代とは

- 「もはや”Web”ではない」：初期の Web とは別物であるという明確な意識を持った。
- Web2.0 という言葉自体は「はやり言葉(buzzword)」であるが、Web1.0 とは別物であると思うに至った現象は本当である。(別物だと思わせた何かがあるということ)
- 図書館だって電子ジャーナル登場以前と登場以後では明らかに別物である。
- Library2.0 は Web2.0 のはやりになつたといえるが、図書館サービスのバージョンをあげようという図書館関係者の意識は本物である。
- Web2.0 の特徴 (別物であると思わせた何かとは?)
  - ティム・オライリーの論文
    - ユーザ指向 (ユーザの手による情報整理、リッチなユーザ体験、貢献者としてのユーザ、ユーザ参加)
    - ロングテール、集合知、オープンソース、多様なサービス技術
  - Google, Amazon, Yahoo, Wikipedia, mixi, OKWave
- Library2.0 の特徴とは? (図書館サービスのバージョン 2 とは?)
  - Web2.0 と同じくユーザ指向であることは間違いない。しかし、そのユーザ指向の中身まで Web2.0 と同じかどうかはわからない。たぶん違うもの。
  - 「図書館はずっとユーザ指向だった」というのは本当?
  - 電子サービスを当たり前のサービスにすること
  - 電子図書館：ハイブリッドライブラリからネットワークライブラリへ
- 気の早い人は Web3.0 とか言っているが、Library3.0 とは何でしょう。

## 7. Web2.0 時代の図書館サービス

- One Stop ポータルという考え方はもう古い。
  - One Stop なんて無理。世間には One Stop だらけ。
  - 人は玄関ではなく居間 (リビング) で生活する。
- ポータルを部品のひとつにする。
- Google も部品のひとつである。
- Amazon も部品のひとつである。
- 利用者の知的活動の過程を記録、支援するポートフォリオ型システム
- 知識創造型図書館